―― この島で生きてきた

漁師と農家の人生

八丈島の暮らしは、自然と切り離して語ることはできない。
今回お話を伺ったのは、長い年月、農業や漁業を通してこの島を生きてきた人たち。
時代とともに景色が変わる中でも、変わらず続いてきた日々の営みと、
その人生を、言葉とともに記録する。

**中学卒業後から漁師として
人生を歩んできた豊倉 貞夫さん。
その言葉から、八丈島の海と
漁師の生き方をたどる。**

父の背中を追い、自然と漁師の道へ

「父親が漁師だったからね。小さい頃から、漁師になりたいと思っていた。」

中学校を卒業すると、父の船に乗り、トビウオ漁に出る日々が始まった。18歳のときには自分の船を持ち、それ以来、海に出ない日はほとんどなかったという。

当時の船は、今とはまったく違っていた。焼き玉エンジンと呼ばれる古いエンジンは、動かすだけでも一苦労。それ以前は、櫓（ろ）で漕ぐ「櫓船」が主流で、遭難も珍しくなかった。

底どり漁と、大物との記憶

現在は、底どり漁でアオダイやオナガダイを狙っている貞夫さん。海水温が高いとアオダイ、冷水塊が来るとオナガダイが獲れる。海の変化を肌で感じながら、その日その日の海と向き合ってきた。

これまでで最も印象に残っているのは、190キロのクロマグロ。電動巻き上げ機がなかった時代、すべて人の手で釣り上げたという。今も鮮明に覚えていると話してくれた。

漁は、人生そのもの

「シケの時は大変だよ。若い頃は船酔いもひどくてね。昼飯を食べずに船で過ごす日もあった。」

漁師を続けてきた理由を尋ねると、貞夫さんはこう答えた。

「漁はもう、人生そのものみたいなものだから。他のことはできないかな。」

たとえ魚が釣れなくても、海に出ていられるだけで楽しい。家にいるより、ずっと海を見て過ごしていたい――海のそばで生きられることこそが漁師の魅力だという。

変わってしまった海と気候

近年、感じているのは海の変化だ。

「テングサやサボテンみたいなサンゴも見なくなった。小さい魚もサバもいなくなった。」

海藻が減り、海の姿は大きく変わっている。それは海だけでなく、島の自然全体にも及んでいるのではないかと貞夫さんは言う。

「昔は八丈島でも毎年雪が積もったよ。今は降らなくなったし、鳥も減った。」

やっぱり海が好き

貞夫さんの姿から伝わってきたのは、「海が好きでたまらない」という、まっすぐな想い。そしてもう一つ――また魚がたくさん獲れる海に戻ってほしいという、願い。

この言葉と記憶が、次の世代へと受け継がれていくことを願いたい。

ロベ栽培を黎明期から知る長戸路 三郎さん。
八丈島の農業とともに歩んできた人生には、
大切な視点が詰まっていた。

農家

仕事への誇り、農業の楽しさ

「自分でやればやっただけの結果がついてくるのが、この仕事なんです。」

言葉の端々から、農業への誇りが滲み出る。これまでさまざまな作物を作ってきた三郎さん。今はマンゴー栽培にも力を入れている。

「歳をとってきてね、今度はマンゴーをやろうと思って。」

そのような挑戦ができるのは、ロベのおかげだと三郎さんは話す。

「出荷しようと思った時が、出荷のタイミングだから。一年を通して自分で決める。それに合わせて、他の作物やチャレンジができる。」

農業以外の経験、それでも農業を選んだ

若い頃は、さまざまな仕事をした。

「稼ぐといえば船に乗る仕事でね。漁師もやったし、潜る仕事もした。いい稼ぎになった。」

都会への憧れを抱き、東京へ出て働いた時期もある。

「でも、10年経ったら八丈島に戻ると決めていた。いつも頭の中には、ここがあった。」

きっかり10年後、末吉に戻り、そのまま農業の道へ進んだ。

母に教わったこと

農業を始めた頃は考え方も今とは違っていた。

「若い時はたくさん育てて、たくさん出せればいいんだろうと思ってた。」

その考えを変えたのは、母の存在だった。

「おふくろが亡くなったあと、当時の仕切りのハガキが出てきたんだよ。金額を見てびっくりした。」

母の得た信頼、は今でも続いている。

「おふくろから引き継いで何十年も出し続けている市場があるんだよ。金額も絶対に下げない。本当に信用してくれている。いいものを作れば相手にも伝わる。」

【切り葉日本一】の誇りを、これからも

八丈島で農家をやる若い人にも、とにかくいいものを作って欲しいという三郎さん。

「八丈には【切り葉日本一】って名前がある。そのプライドをもって出荷できるようなロベを、皆さんにも育ててもらいたい。悪いものは出せない。それまで得た信用がなくなっちゃうからね。」

良いものを作り続けることが、島全体の信用につながる。

三郎さんは力を込めて語ってくれた。

まだまだ楽しみながら

「のめり込んでいく楽しさが半分、大変なのが半分。まだまだやるよ。」

そう笑いながら、自慢のマンゴーハウスを案内してくれた。新しい売り方も考えているという。先を見る目は今もなお現役だ。

八丈島が築いてきた誇りと信用、それが続いていくことを願いたい。

取材後記

今回、貞夫さんと三郎さんのお二人にお話を伺って自然と共に生きてきた八丈島の人たちの努力と情熱、そして誇りを感じました。

八丈島の豊かな自然がこれからも受け継がれていくこと、そして貞夫さんと三郎さんが元気にお仕事を続けていかれると共に、八丈島の産業がより一層栄えていくことを願っています。